

繭と生糸は日本一の群馬へタイムトリップ



19世紀のヨーロッパでは絹の需要が増え、「殖産興業」を進めていた明治政府は、良質な生糸の輸出拡大を図り外貨獲得に乗り出しました。富岡製糸場（富岡市）、田島弥平旧宅（伊勢崎市）、高山社跡（藤岡市）、荒船風穴（下仁田町）は、それぞれが連携して国内の絹産業を牽引しました。その歴史的な功績と価値が認められ、「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、2014（平成26）年にユネスコ世界文化遺産に登録されました。

今回、「養蚕教育の父」といわれている高山長五郎の偉業に触れようと藤岡市の「高山社跡」を訪ねました。

日本近代化の原動力となった絹産業を牽引 ― 世界文化遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」―



荒船風穴（甘楽郡下仁田町）／国内最大規模の蚕種（蚕の卵）の貯蔵施設。岩山の底で放出される冷気を利用し孵化の時期を調整することで、春にしかできなかった養蚕が1年に複数回できるようになり繭の生産量の増大、生糸の増産につながりました。取引先は全国に及びました。



高山社跡（藤岡市）／「養蚕改良高山社」の創始者・高山長五郎の生家。田島弥平の清涼育に影響を受け新たな養蚕法「清温育」の研究と指導を発展させた場所。蚕の病気を出さずに繭を収穫するのが難しい時代。成果を出した蚕の飼育法を求め全国から生徒が集まりました。



富岡製糸場（富岡市）／1872（明治5）年、日本有数の養蚕地域に、フランスの先進的な技術を導入して建設された官営の製糸工場。器械製糸による均一で良品質な生糸の大量生産と、伝習工女に習得させた器械製糸技術を全国各地に広めるという二つの役割を担いました。



田島弥平旧宅（伊勢崎市）／風通しを重視した養蚕法「清涼育」を大成した田島弥平が、文久3年（1863）に建てた住居兼蚕室。初めて屋根に換気用の越屋根が付けられるなど、近代養蚕農家建築の原型になりました。蚕種（蚕の卵）製造を行い、中国や朝鮮半島にも輸出しました。



養蚕教育の父 高山 長五郎

文政13（1830）年～明治19（1886）年
緑野郡高山村（現在の藤岡市高山）生まれ
「国利民福」を掲げ、養蚕教育機関「高山社」を設立。

養蚕法『清温育』を広めた養蚕学校

母屋兼蚕室を復原工事中 修復の様子を見る貴重な機会

藤岡市南西部の山間に佇む「高山社跡」を目指して進むと、道路の右側に専用駐車場が出てきます。そこから徒歩で三名川にかかる橋を渡ったところにガイダンス施設「高山社情報館」があり、その横の竹林を遊歩道に沿って歩きます。再び三名川にかかる橋を渡ると、石垣の上にとっしりした構えの長屋門（江戸時代後期の建築）が現れます。

現在、母屋兼蚕室は100年前の建物に復原するための工事が進

行中。全解体して取り出した一本一本の梁や柱の傷んだ部分を切り取り新しい部材を付け替える作業が文化財修復を専門にする技術者の手で進められています。

世界遺産の復原の様子が見られるまたとないチャンス。常駐のガイドさんを水先案内人に、繭と生糸は日本一の群馬の歴史にタイムトリップできます。

ルーツは城持ちの豪族

高山家は中世では地侍で、近世には代々名主を務める家柄でした。18歳で名主になった高山長五

郎は、貧しい村民の暮らしぶりに心を痛め、現金収入が期待できる養蚕業に着目しました。

実際に足を運んでみると、稲作が困難な土地柄だったことに納得。「あの山の上に高山城がありました」と、ガイドさんが裏山の頂を指さしました。館跡が残る豪族をルーツに、この家に代々受け継がれたリーダーの資質が長五郎の中に息づいていたと感ずります。

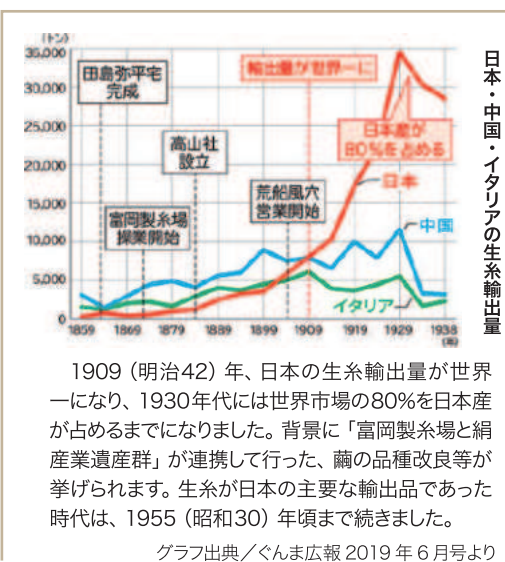
繰り返す失敗から得た成果

江戸時代に着物の需要が増加し、養蚕は農家の収入源として発展しました。安政6（1859）年の横浜開港を機に絹織物、生糸、蚕種

などが輸出を伸ばしました。

しかし、蚕は「天の虫」「運の虫」といわれるほどデリケートな性質で、当時は蚕が死んでしまう病気が発生し農家は被害を受け、長五郎も数年間この病気に悩まされました。病気を出さずに繭をとることは、大変難しいことだったので、長五郎が養蚕を始めたのは安政2（1855）年頃でした。

先祖伝来の高山家の立派な家屋では空気の流れが悪く養蚕に向かないと気づいた長五郎は、屋敷を解体し、蚕の飼育に適した家屋を建て、養蚕を続ける資金も手に入れました。そして、有名な養蚕家や成功した農家を訪ね、飼育時の気温や湿度、天候を細かく記録するなど研究を続け、6度の失敗を繰り返し、やっと成果を上げることができました。





長五郎の遺志を継いだ 町田菊次郎

嘉永3(1850)年～大正6(1917)年
緑野郡本郷村(現在の藤岡市本郷)生まれ

高山社2代目社長の町田菊次郎は、明治34(1901)年に藤岡町に「私立甲種高山社蚕業学校」を開校し、初代校長を務めました。より多くの生徒を指導するため、優秀な社員の家を「分教場」として清温育を教えるようになり、全国116ヶ所に設置。卒業生は19,794人に上りました。

安定的な繭の生産に導く 養蚕法を確立・指導

明治元(1868)年、長五郎が考案した「清温育」は、様々な飼育法の研究と実践を繰り返して、明治17(1884)年までに確立されたと考えられます。評判を聞きつけた農家が教えを求めるようになり明治6(1873)年に、長五郎は「養蚕改良高山組」を設立。自宅で村の農家に飼育法を教え始めました。

「養蚕法」「清温育」は、山間地域で盛んだった、火を使って部屋を暖め人工的に温度を管理した「温暖育」と、火を使わず、換気を重視して飼育する「清涼育」の折衷育です。暑い時や高温度の時に換気を行い、寒い時は火を焚いて蚕室を暖めるといように温湿度の調節と換気を重視しました。桑の管理の仕方や蚕の成長段階に応じた桑の大きさと与え方をマニュアル化したことが特徴です。

「国利民福」「救世済民」を掲げて

長五郎は、全国から集まった生徒に格安で分け隔てなく養蚕技術を教え、明治17(1884)年には輸出を見据えて「養蚕改良高山社」を設立しました。長五郎が56歳で他界した後は一番弟子の町田菊次郎が遺志を継ぎ、高山社2代目社長に就任。

教えを乞う生徒が増えたため、明治20(1887)年に、事務所と伝習所を藤岡町に移しましたが、その後も高山家は「高山分教場」として機能し大勢の生徒が寮生活を送りながら養蚕法を学びました。

明治34(1901)年には「私立甲種高山社蚕業学校」を開校。町田菊次郎が初代校長を務めました。ここでは養蚕に関する技術以外に国語や漢文、数学、物理、化学なども教え優秀な人材を育成しました。



藤岡町に開校した「私立甲種高山社蚕業学校」

そして、卒業生の中から優れた人材は「授業員」として派遣され、「清温育」は全国標準と言われるまでにまりました。また、蚕種「又昔」を授業員が販売したことから、清温育とともに全国に普及しました。

長五郎と菊次郎は、それぞれ「国利民福」「救世済民」を掲げ、社会の利益や人々の幸福のために力を尽くしました。

大正時代になり、全国各地に蚕業学校が設立され、新しい飼育法や飼育しやすい蚕種が開発されると、人手をかけた細やかな作業が必要な清温育を学ぶ生徒は減少し、昭和2年(1927)に高山社蚕業学校はその役割を終え廃校となりました。

■世界文化遺産 高山社跡

住所：藤岡市高山237番地
開館時間：9時～17時(受付は16時30分まで)
観覧料：大人500円(20名以上の団体400円)
※団体での見学は事前予約が必要。
高山社情報館まで。



外便所と奥に見えるのが焚屋(風呂場)



桑貯蔵庫

■高山社情報館

高山社情報館は、「高山社跡」へ向かう途中に立ち寄れます。分教場・養蚕教師についてのパネル、養蚕道具、寄贈資料等を展示し、かつて日本の養蚕業をリードしていた高山社と藤岡の養蚕業について紹介しています。

住所：藤岡市高山217番地1 TEL：0274-23-7703
開館時間：9時～17時 入館料：無料 休館日：12月28日～1月4日

